慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	片山謙二 狭間源三共著 自由化とブロック化
Sub Title	
Author	矢内原, 勝
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.12 (1964. 12) ,p.1063(123)- 1064(124)
JaLC DOI	10.14991/001.19641201-0124
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19641201-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

るのは正しくない。なぜなら、わが国の企業別組合の再検討がイギリスを中心とするヨーロッパの横断組合を念頭に描いている以上、イギリスの労働市場は何故に、横断的な形成をみたのか、この問題をぬきにしては日本の企業別組合論の研究はもはや何らの成果を生まないであろう。その場合、ただたんに、イギリスにおける労働者階級の創出過程の分析だけでなく、まさしくその賃労働の担い手たる労働者の側における主体的な動き、たとえばその組織としての共済制度の如きも決して無視されてはならない。

本書についてその内容を検討し紹介すべき点はあまりにも多い。筆者は、わが国において、自然発生的且つ自主的な大衆組織が、明治以来健全に育つことができず、従って大衆の組織化の困難を現時点においても痛切に感じている。わが国における企業別組合の組織形態は、横断的な大衆組織の欠如と深く関連しているような気がしてならない。イギリスをはじめヨーロッパ諸国における共済制度のきわめて早期の発展をみるとき、そのことを殊更に深くするものである。本書をよむに従って筆者は、イギリスには何故にかくも自主的な大衆組織が早くから広はんに根をおろしたかについて更めて考えさせられたのである。

わが国における企業別組合は、もはやその限界にきているといわれ、企業別組合からの脱皮が叫ばれてからすでに久しい。その条件はどこにあるのか。「賃労働における封建性」論や「アジア的共同体」論では、ますます宿命的な視点におちいるのではなかろうか。こうした疑問について、ゴスデンのこの著は、それを読む者にたいし、その問題への接近のためのひとつのヒントを与えるにちがいない（¥1,950）。

——一九六四・一〇・一四——

新刊紹介

『アジア経済の長期展望』

アジア経済研究所
研究参考資料第六八集

ここ数年、学生諸君の間で、低開発国問題、そしてとくに東南アジア諸国の経済開発問題を卒業論文のテーマとされる人が頗る多い。ことに最近における南北問題の展開や、今春の国連貿易開発会議の開催などを契機として、この傾向はさらに増強されるのではないかと想像される。

もちろんこれまでにも、アジア経済に関する幾多の著作や論文が発表されており、研究上の参考文献にはこと欠かない筈である。しかし問題の把握に際して、先ず基礎的な参考書と取り組む必要は、少しも変らない。その意味でこれまでアジア経済の研究を志す学生諸君に、必ず一読を薦めていた本に、今では少し古くなったが、日本エカフェ協会編「アジア経済発展の基礎理論」（一九五九年、中央公論社刊）がある。

それは題名の如く、理論的解明に重点をおき、二十九篇の論文集かり成り、当時としての日本のアジア経済研究の水準を示すものであった。しかし同書に欠けたところは、実証的分析による裏付けの欠如ということであった。

ところで「アジア経済の長期展望」は正しくその欠を補うに足るものと評価できる。本書には日本で最大の組織をもつアジア経済研究所が二年余りの歳月と百名を越える研究者を投入し、わが国では最初のアジア経済研究に計量的手法を導入して行われた実証的な研究の成果である。

それは一九七〇年を対象年次として、日本および共産圏諸国を除く十八ヵ国をとりあげ、そのうち十ヵ国についての総体展望と共に、各国についての国民総生産と主要商品二七品目に関する需給予測を行っている。

本書の具体的内容について触れている余裕を有しないが、例えば東南アジア諸国の国民総生産の成長率が、七〇年までの一〇年間に年平均四・一％（一人当り一・八％）と計算されている。独立に伴う経済開発の実行にも拘らず、まだまだ東南アジア諸国の経済発展の前途は決して明るくない点を、読者は容易に読みとるであろう。

それよりも学生諸君にとって貴重なのは、農業、工業、資源等について各国別、商品別に行われた分析結果の内容である。七九一頁にわたるこの大著の中から、研究上活用しうる多くの資料が発見されるのである。

とまれこうした大著に取り組むことにより、アジア経済の実態と展望についての知識を備えた後、各自の研究テーマを決めることが望ましい。（東大出版会刊・B5・八〇〇頁・二、一〇〇円）

—山本　登—

＊　＊　＊

『自由化とブロック化』

片山謙二
狭間源三　共著

本書は片山謙二、狭間源三両氏の共著となっているが、実際には両氏の関係しておられる関西EEC研究グループのメンバー、行沢

健三、内田勝敏、奥村茂次三氏の協力によっている。近代経済学かマルクス経済学か、というわけ方をすれば、この研究グループは後者に属する。本書も『自由化とブロック化』という表題を掲げているが、マルクス経済学、より具体的には帝国主義論による世界経済分析ということができよう。

「あとがき」によれば、本書のねらいは二つある。第一は「自由化とブロック化」という角度から、世界経済が変貌してゆく過程を明らかにすること、第二は世界市場の支配者を中心として、その国が市場支配権を確立し、かつそれを失ってゆく過程を明らかにすることである。前者では総合的、後者では個別的な分析をめざし、これは本書の二部構成、第一部「自由化とブロック化の変遷」、第二部「自由化とブロック化の中心とその周辺」に対応している。

世界経済において自由化といえば、貿易、為替の自由化を意味し、自由貿易主義にほかならない。これに対してブロック化は、保護主義であって、世界経済の歴史をみるとたしかにこの二つの思想・政策は交互に前面に出てきたように思われる。重商主義は一種のブロック化であり、つぎの一九世紀の前半、イギリスが世界工業生産の五〇％を占め、世界の工場となり、世界経済の中心となった時代は自由化の時代である。さらに一九世紀の終りから二〇世紀の初めにかけて、資本主義が帝国主義時代に入って現われる、植民地獲得あるいは再分割運動はまさにブロック化である。第二次大戦後の世界経済は、分断された世界経済の復興という努力のなかで一応自由化の動向を示した。ところが一九六〇年代に入って自由化とブロック化に含まれる諸問題を中心として、世界経済の仕組みが大きく変り、新しい型のブロック化を通じての自由化が特徴になる。しかしながら、自由化といいブロック化といっても、これらは、市場圏拡大という資本主義生産に固有な衝動が現われる二つの側面であり、同一の動きの二つの側面である。自国を中心としていえば、市場圏を拡大するためにはブロック化の欲求となり、他国に対しては自由化の要求となる。

したがって本書は結局は現代の資本主義的世界経済体制の批判となり、日本については、アメリカ依存体制を批判し、後進国市場を見直せという示唆になる。ただし今日の世界経済の直面する諸困難は指摘されているが、その具体的解決策には、あまり触れられていない。諸困難は資本主義体制の枠内では解決されず、これを打倒することが究極の解決策ということになるのであろう。

以上のような観点についての問題は別として、平易な文章、豊富な資料は戦後の世界経済の概観をえるのに便利であろう。（河出書房新社・現代の経済第二巻・一九六四年六月刊・二七八頁・二九〇円）

—矢内原　勝—

＊　＊　＊

大熊一郎編『財政読本』

戦争が終って二〇年を経ようとしている。すべてが変ったばかりでなく、時々刻々変ろうとしている、財政にしても同じである。財政が私たちの生活を支配する力は飛躍的に高まったけれど、身近かに感じにくいことばかりで、財政に支配されていると自覚している人はあまり多くないだろう。先日も経済学に無縁の先生から「戦前は税金の苦情などなかったのに、どうして近頃は経済が豊かになり民主化されたのに税金が重くなったのでしょう」と御質問をうけた。財政の中でも私たちの生活に一番身近かな税金ですら、専門外の人々には「化物」にみえるのかもしれない。しかしだれにとっても今日では、財政に無関心でいようとしても無関心たりえないことは確かである。

「財政読本」という名前のこの本は、とっつきにくいという印象を与えることがない。それに内容も一般の人に理解しにくいことまで押しつけようとはしていない。「読本」という性格からくる「分」をわきまえているわけである。けれども財政という仕組み自体が今日では尨大かつ複雑化しているのだから、多少ともむつかしいところがないわけでもない。しかしそれもよく読めばわかる「むつかしさ」である。

この本の特色の第一は、「はしがき」にもあるように、「理論の一歩手前で財政のしくみとその実質内容を解説」していることである。といってもこの本を分担執筆した大蔵省の諸氏は、いずれも経済理論につよい人たちだから、理論的に一貫していて少しもソツがない。編書であってかつ入門書という本は、とかく性格が曖昧になりがちだけれども、この本がその弊害を免れているのは共通の理論的基盤があったからである。他の編書にも見習ってほしい特色である。特色の第二は、「日本財政の現状を説明すること」に限定し歴史的な考察は省略」したことである。旧版「日本財政読本」では、財政の思想や歴史、それに外国の財政事情にいたるまでソーセージのようにつめこんであった。それだけに複雑な味があったが、総花式の雑駁さはどうにも隠しようがなかった。いま生きている私たちにとって大事なものは今日の財政であって、その理解のためにいま生きている財政学者は一層の工夫が必要なのである。日本財政の現状を知るためには、歴史的な考察が大切であることを充分わきまえた上で、新版「財政読本」では大胆な割愛にふみきることになったようである。またそれが見事に成功したのだから、この読本は東洋経済出版の読本シリーズの中でも、ユニークな存在価値を誇ってよいと思う。

財政とはなんぞや、なぜ税金が重いのだろうか、と首をひねる人を含めて広く一般にこの本に眼をとおすことをお勧めしたい。それが財政につよくなる最短コースだからである。（東洋経済・A5・二七六頁・四八〇円）

—古田精司—

＊　＊　＊

篠原三代平著『経済成長の構造』

日本経済が、ここ数年の間に、かつての超高度成長の局面からはなれて、ようやく設備投資沈静期にはいりつつある。この転機にのぞむ日本経済に対して、長年、その成長と産業構造の実証的な分析に取組んできた著者が、自分自身の分析視角をあきらかにしたいという意図であらわしたのが本書である。

本書は、著者が、最近執筆した論文数編を基軸にして、まとめた論文集のような体裁をもっているので、その内容を統一的に紹介することはできないが、大雑把に言って、二つの問題にしぼられよう。すなわち、第一編「日本経済の成長力」における日本経済の成